

## 水稲品種「ウズシオ」について

橘高昭雄・向井 康・上野貞一・衛藤信男・新村善弘  
(宮崎県総合農業試験場)

KITSUTAKA, A., MUKAI, Y., UENO, S., ETO, N. and SHINMURA, Y.

## A New Rice Variety "Uzushio"

南海地帯の普通期水稲は風水害、病虫害および秋落などの災害が多く、これら災害に対する抵抗性品種の育成が要望されている。「ウズシオ」は前記の要望に応えるべく育成され、昭和42年から大分県および徳島県で奨励品種に採用され、普及に移されることとなったので、育成の経過および特性の概要をのべて参考に供する。

なお、本品種育成にあたり試験に協力をいただいた関係各県農業試験場担当者各位に深甚の謝意を表す。

## 来歴ならびに育成経過

ウズシオは昭和31年、宮崎県農業試験場において、農林18号を母、農林29号を父として交配し、同年冬季ガラス室でF<sub>1</sub>を養成し、以後系統育種法により選抜固定をはかり、昭和37年より「南海25号」の系統名で関係県に配付して地方適否を検討した結果、優良と認められ、昭和42年に水稲農林 188号に登録され、「ウズシオ」と命名された。

## 特性概要

第1表 一般特性

品種	形質	出穂期 月日	成熟期 月日	稈長 cm	穂長 cm	穂数 本	抵抗性			a当 玄米 重(g)	同左 比率 %	玄米 千粒 重(g)	品質	食味	
							倒伏	ハイモチ	ホイモチ						白ハガレ
ウズシオ		9.4	10.16	87	20.7	16.6	中	やや弱	やや強	やや強	42.3	103	22.5	中上	上
アリアケ		9.4	10.17	91	19.4	15.9	弱	やや弱	やや弱	やや弱	41.2	100	22.4	中中	中
農林18号		9.6	10.21	95	21.1	14.5	弱	やや弱	やや強	やや強	43.8	106	24.0	中上	上
調査地(年)	宮崎県総合農試 生検標肥(昭・37~41)														

## 適地および奨励品種採用県

昭和37年以降5ヶ年にわたる配付先各県の試作成績をみると、静岡、四国全県および九州の殆んど各県の平坦部および山麓部で、各年次共安定した収量を示し、白ハガレ病、倒伏にも強いので地域適応性は高いと思われる。これらの地帯ではアケボノ、ミ

## 1. 形態的特性

稈はアリアケ、ミホニシキよりやや短かく、穂は長く、穂数も比較的多い中稈やや穂重型の稈種である。葉の大きさは中位で、直立型ではないが、葉枯れは少なく、熟色は良い。無芒で稈先色なく、粒着密度は中、脱粒性は難であり、玄米は中形中粒で、心白腹白ともに少なく、品質食味ともに良好である。

## 2. 生態的特性

出穂期はアリアケ、ミホニシキより1~2日早い、成熟期はほぼ同じで、九州では中生乃至中晩生種である。葉イモチ病耐病性は農林18号なみであるが、穂イモチ病にはアリアケ、ミホニシキより強く、中~やや強の耐病性を示し、白ハガレ病にはアリアケ、ミホニシキにまさり、やや強に属する。多肥で穂がなびく傾向にあるが、倒伏抵抗性はこれら比較2品種にまさり、この草型のものとしては強い。モンガレ病およびゴマハガレ病の発生も少なく、秋落抵抗性も大きい。生産力は配付先各県で比較的高く、かつ安定している。

ホニシキ、農林18号などに倒伏が目立っており、また、アリアケは中南部九州、南四国で品質が低下し易い欠点があるので、これらの品種に替って普及するものと考えられる。昭和42年から大分県および徳島県で奨励品種に採用され、それぞれ8,000haおよび5,000ha、計13,000haの普及が見込まれている。

**栽培上の注意**

地域適応性が高く、倒伏にも従来の中長稈種より強く、耐病性も安定しているので栽培上特に注意する点は少ない。しかし短稈種でない点と、葉イモチ病耐病性が従来品種に比べとくには強くなってい

ない点から、極多肥栽培には適しない。なお、晩植栽培の場合にはイモチ病防除に留意するほか、苗代日数もシモツキ、相川44号など極晩感光種を用いる場合より短かくする必要がある。

第2表 採用県における収量比

場所 品種	大 分 県						場所 品種	徳 島 県							
	本場標肥		本場多肥		宇佐分場			本場標肥		本場多肥		富岡標肥		富岡多肥	
	玄米重	比	玄米重	比	玄米重	比		玄米重	比	玄米重	比	玄米重	比	玄米重	比
ウズシオ	55.8	104	54.2	96	51.5	101	ウズシオ	46.0	108	47.7	110	36.6	106	34.9	105
アリアケ	53.5	100	56.3	100	51.2	100	ミホニシキ	44.5	104	44.7	103	36.7	106	34.1	102
農林18号	52.6	98	55.3	98	49.7	97	アケボノ	43.1	100	43.4	100	34.5	100	33.3	100
供試年次	38~40				39~40		供試年次	37~41				38~41			

**命名の由来**

主要な適応地の徳島県および大分県にある鳴門海峡および豊後水道の渦潮にちなんだ。

**結 言**

南海道秋落地帯の主要品種である農林18号、ミホニシキ、アケボノなどはいずれも倒伏に弱く、このため増肥多収技術の導入が妨げられている。また現在の短稈穂数型品種では病害の多発や生育量の不足

などのため収量の上らない地帯が多い。本品種は既存種の倒伏抵抗性を改良し、また耐病性を賦与した品種として、これらの地帯に普及し、稲作の増収と安定に寄与するものと思われる。なお、葉イモチ病耐病性については改良の余地が残されており、また草状その他についても今後はさらに多肥向きの方向に改良する必要がある。

